

戦後すぐに朝鮮の光州から引き揚げた友人の花子さんは光州を故郷のように思いながらも、侵略者の末裔としての申し訳なさに涙しながら、韓国、北朝鮮の人々にいつも強い関心を寄せています。彼女に勧められて4月に日本で封切られた2017年制作「タクシー運転手～約束は海を越えて～」をみました。韓国では様々な賞を受賞し、多くの観客を集めたとのことでした。



映画は1980年5月に光州で起きた民主化運動取材したドイツ人記者と彼をソウルから光州まで案内したタクシー運転手の実話をもとに製作されました。この時代は、軍事政権の朴正熙大統領が側近によって暗殺され、全斗煥大統領が政権を握ったばかりの頃です。金大中氏が日本のホテルでKCIAにより拉致され、殺害されかけたのはちょうどこの頃でした。当時「韓国からの通信」(TK生著)により韓国の民主化を求める運動が厳しい弾圧を受けている様子を多少は知っているつもりでしたが、自分自身の生活に追われ、隣国のことでも他人事のように流していたことを、この映画をとおして、衝撃の事実を知らされ、無関心、無知を恥じ入りました。

映画の主人公は私と同様、生活に追われていましたから、予想外の報酬が見込めるので、単純に喜び、光州までお客を乗せていく、庶民のタクシー運転手です。韓国内では各地で学生による民主化運動が広まりを見せ、混乱や迷惑を被る場面がでてきます。主人公もデモ隊に道を塞がれては、「学生は何をしているんだ！」と愚痴り、怒る日常でした。特に、光州では民主化を求める学生や市民の運動が高まり、それを封じるために戒厳令が敷かれ、情報も遮断されてしまいました。そのため主人公の客、ドイツ人の記者は隠された事実を求め、取材を狙っていたのです。なんとか、封鎖を突破して光州に入りましたが、彼らが目にした状況は丸腰の学生、市民に対して、軍隊が実弾を浴びせて、抹殺、排除する信じられない暴力でした。病院は死者、負傷者であふれています。記者は危険の中で取材を続けます。この状況を地元の新聞社の記者が発表しようとしても、当局の手が入り、当局側の発表しか許されません。運転手は関わり合いになることを恐れましたが、偶然知りあい、通訳をしてくれた光州の学生は真実を世界に伝えてほしいと訴えます。また、光州のタクシー運転手たちが怪我人を運ぶうちに、この運動に積極的にかかわるようになっていきました。激しい銃撃を目撃し、多くの死者の目撃者となった記者と運転手は当局に狙われました。自国民への残虐な軍隊の実態を、なんとしても世界に人に知ってもらいたいと、命をかけてこの事実を公表し、助けてほしいと願う光州の学生、市民の思いは運転手の思いとなり、決死の光州脱出、記者出国となりました。

現在、私たちが目にすることのできる光州事件と言われるこの時の映像は、彼らもたらしたものです。権力者は政権を批判するものを、「アカ」と決めつけ、弾圧の口実にしました。朝鮮戦争は休戦中とはいえ、絶えず対立、危機を煽り、政権保持のためには、抵抗すれば自国民でさえ認めません。軍事政権であれば、弾圧は暴力的になっていきます。



この映画がきっかけで、ドイツ人記者が行方を求めていた運転手が判明しました。彼は既に亡くなっていましたが、記者と一緒に写っている男性(右)が運転手キム・サボク氏です。彼の働きなしには報道は不可能だったと思います。同時に、韓国の人々の民主化を求めて抵抗する姿勢、たくましい生き方、心をさらけ出して隣人と向かい合う人間味あふれる温かさなど、多くを感じました。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。(ヨハネ3:20)とのみ言葉が心に響いてきました。